

# 海 (かいし) 市

No. 41

## ● 詩

02 前田 勉 幻影・八郎湖

06 横山 仁 生活の柄 (34)

## ● エッセイ

10 細部俊作 本をひらく (6)

13 佐藤ただし 水田とツバメ (39)

17 横山 仁 雑記 (41)

## 幻影・八郎湖

——三倉鼻公園で——

前  
田  
勉

静かな

小さな丘に集うと

八郎湖の陽に向かうように

そこに在る碑いしぶみ

が

時を超えて

語りかけて来る

この小さな丘の裾にまで

きらめく波が及んでいたという

隠されて久しい情景が

ここに刻まれていた

遠い

とおい

むかしから

詩人たちはこの地に立ち

みずうみを

山を

先人の道を

偲んだ

集まった人たちの会話が途切れた

ほんの少しの間

その刻みの合間で

それぞれが

それぞれに

想いをひろげ

それぞれ

に

放たれていたのは  
何だろう

碑の後ろから

時

を

確かめようとすると

葉末はすえに瞬く陽光が

碑面の文字を揺らし

みずうみの

岸部に漂ううたかたとなって

消えてしまった



## 生活の柄(34)

横山 仁

『朗読のための古訓古事記』<sup>\*1</sup>をよんでいて、神々の名前など、旧かなの読み方が、どうしても不明なものがある。たとえば、つぬぐひのかみ。ひを、いとよんでいいのかどうか。『古事記』関係の本は十数冊くらいあるがわからず、そのため入手したのは、『ことばで聞く 古事記―「古事記に親しむ」より―』<sup>\*2</sup>で、これだと、つぬぐいのかみ、と発音している。角杙神（言霊キ）については、《角の活らきの杙すなわち、柱、拠り代、生きることの拠り代となる音と云うほどの意味と解せられよう》<sup>\*3</sup>とある。

《(成りませる神の名)『古事記』を読むにはそれを

構成している漢字を一旦元の大和言葉に還元して、その広汎な包括的な意義を見て行かなければならない。神の生成を客観的な「それ」の問題と考えず、自己内面の靈性の自覚とその自己表現である言語（言霊）の発生と観て、「なる」と云う言葉に鳴と云う字を傍にすると、此処の所の理解が出来る<sup>\*1</sup>。最後の文の意味が不明だが、参考までに引用しておく。

《生命の活動を岐美二神の嫁の道と云い、美斗能麻具波比と云い、婚ひと云う。ヨバイは呼び合いである。それは母音（アイウエオ）と半母音（ワヰウヱヲ）が呼び合うことであり、また父韻（ヒチシキミリイニ）と母音（アイウエオ）が呼び合うことである<sup>\*5</sup>。》つまり、父韻Kと母音IでK+I、キであり、父韻が先にこなければ、音にはならない。

\*1 岸本弘編『朗読のための古訓古事記』（国民文化研究會、令和4年）。「古訓古事記」は、本居宣長が解説

したもので、幸田成友校訂の『訂正古訓古事記』が岩波文庫から出されている。

\* 2 佐久間靖之編集・素読監修『ことばで聞く 古事

記―「古事記に親しむ」より―』（青林堂、平成24年）

\* 3～5 小笠原孝次著、七沢賢治監修『古事記解義

言霊百神〔新装版〕』（和器出版、2021）。ルビは

多いので、ほとんど省略した。





## 本をひらく（六）

細部 俊作

『歌うように伝えたい』 塩見三省著

著者の塩見さんは、俳優で一九四八年生まれ。名前だけではどんな人か思いつかなかった。表紙カバーの折り返しの略歴の中にNHK連続テレビ小説『あまちゃん』とあり、顔写真も見てようやく合点がいった。この連続ドラマは、東日本大震災の二年後の二〇一三年四月から放映された。やがて被災地となる架空の「北三陸市」を舞台に、琥珀色の勉強さんを演じていたのがこの人だった。石の美しさに魅了され、坑道にツルハシを振るったのか、掘り出した琥珀を人に見せたりしたシーンがあったような覚えがある。このドラマの翌二〇一四年三月に脳出血を発症。その結果左半身が

麻痺して大きな障害が手足に残った。このとき著者は六六歳だった。

この本は、そのときの闘病記から始まる。右脳の出血により、左半身の運動と感覚神経が麻痺していて手も足も動かない。「それまでの人生にはもう戻れない。（略）重度の障害を抱えてしまった」。その後、直面した後遺症とリハビリのことを書いているが、これほどまでに激痛に苦しむものだとは知らなかった。私は入院もリハビリも経験がないから、書かれているまま読んだままに想像するばかりだった。

後悔と失意に打たれる日々のことが綴られ、一方、リハビリ患者同士の共感や励ましあいのことが書かれている。病院もひとつの人間社会、同じ立場にあり同じ苦痛とたたかっている者同士が互いを認め合い、助け合っていたのだと思う。退院後は想像以上に社会からの孤立を感じたともいう。これも体験者でなければ分らない。

発症後の苦しみの日々の記録の後に、著者が俳優人生の初期に出会って影響を受けた諸先輩（向こう岸

にわたった人たち」、たとえば岸田今日子、芥川比呂志、つかこうへい、中村伸郎、長岡輝子、植木等などベテランたちとの出会いや交流を回想している。また、退院後に、障害をかかえたままドラマや映画に復帰してからの、監督や共演者たちのことも書いている。多分、浮き沈みの多い業界ではないのだろうか、そんな世界で自分を見失うこともなく、彼らの言葉や振る舞いのなかから多くの気づきを養分にしてきたことがうかがえる。リハビリでは偶然にも「ミスタープロ野球」長嶋茂雄と遭遇し、温かい激励を何度もかけられた。こうした人たちとの出会いを「出逢う力」という表現で次のように記している。

自分には誇れるものは何もないが、「人に出逢う力」だけは持っているのだろう。私はこれまで人との縁に助けられてここまで来た。しかしそれは私が諦めずに逢いたい人に会う、その縁みたいなのを強く望んでいたからかもしれない。だとすればこれから踏み出すところは、私の思いが深く強ければ、その行く道は荒地ばかりではないと思う。

著者は、人生を中断された、と想っていたが、それは東日本大震災の被災地の人たちにとっても同じだと気づいた。喪失、哀しみ、絶望、少しの希望など、様々な思いを胸に復興へと氣力をふり絞っている姿を見ているうちに、自分の胸にも氣力が湧いてきたと書いている。苦しみの中にある人同士、通じ合うものがすぐにピンと来たのだろう。

今の自分が何かをなす時はできるだけ時間をかけ、自然にこの身体に滲み出てくるものを愚直に待とう。それを飛ばすと何事も中途半端になる。そうやって時間をかけてやるためには、まずは生きていること、できるだけ長く生きて、なんとしてもこの自分の成すことの果てを見てみたい。

死（リハビリをやめる、仕事に復帰することを断念する、それは死にも値すると思えたのではないだろうか）と向き合う日々を送った末に、元の仕事の世界に戻る事ができた。生きていてよかったとの実感と自身への信頼感。生きることも死も、この人は観念的に

とらえていない、これが説得力のある所以かと思われる。

この本の題名が含むものは、苦難に見舞われても歌を軽やかに歌える日は必ず来るよ、といったニユアンスだろうか。だから希望を絶対なくすなよ、そんな歌が聞こえる本だった。

(二〇二五年一月刊 筑摩書房 ちくま文庫)

## 水田とツバメ（三九）

佐藤ただし

### ・ダイサギ

五月の末に田沢湖高原へ行った。途中、角館から西木町に向かう車の窓から、遠くに白いサギが見えた。ダイサギだった。ダイサギは田んぼの畔に立ち、静かにエサを探していた。その様子を見ていて、ふと、先日読んだ新聞の記事を思い出した。その記事によると、ダイサギという種の中には亜種ダイサギと亜種チュウダイサギがいて、主に夏鳥としてやってくる亜種チュウダイサギの嘴は黒色だが繁殖期のこの季節になると目元から嘴にかけて緑青色になるという。鳥の世界では婚姻色と言うらしい。また、繁殖期は体全体を飾り羽根で覆い、異性の気を引こうとする。サギの目元を

確認したくて帰りも同じルートで戻り、田んぼにいますダイサギを双眼鏡で覗くと、確かに目元から嘴にかけて薄い緑青色になっていた。チュウダイサギは進化の過程でこのような高貴な色を獲得したのだろう。飾り羽根を身にまとい、優雅に田んぼの中を歩いていた。

ダイサギの魅力を改めて知ったこともあるが、今年も田んぼにサギを多く見かけた。これらの大型のサギの他にコサギやアマサギも時々やってきた。早朝の一枚の田んぼの畔に二十羽のサギが降り立っていることもあった。田んぼにエサが多いのだろう。今年から作り始めた沢の田んぼには、カエルの卵から孵ったばかりのオタマジャクシが水の中を無数に泳ぎ回っていた。また、ゲンゴロウや名前の分からない水生動物が多く生息していた。以前に比べ、田んぼの中の水質がよくなり、生物が暮らしやすくなっているのかもしれない。

宇根豊という人が書いた「減農薬のイネづくり」（農文協）という本を、昔読んだことがあったが、この本が発行された一九八〇年代の頃は、農薬の散布回数が多く、農家の健康被害も深刻でニュースになった時代だ。私の家でも近所の農家と共同で防除機を購入

し、いもち病や紋枯れ病などの農薬は三回も散布していたし、イナゴの防除も毎年のように行っていた。この本に書かれてあったように、農薬の撒きすぎが虫の発生を増やしていた側面もある。

勉強不足で詳しいことは分からないが、当時と比較すると、今は農薬の散布回数も減り、施用方法も変わってきた。たとえばいもち病の農薬は田んぼではなく、苗箱に施用した後に田植えをする農家が増え、紋枯れ病は発生が少なく散布はしていない。散布の仕方でもヘリやドローンに変わってきた。農家の高齢化や人手不足が農薬散布の姿を変えてきたのかもしれない。

私が作っている田んぼに散布している農薬は、一発処理剤の除草剤と、カメムシ防除の農薬だ。

一度、無農薬で二〇アールの田んぼを作ったことがあったが、当時は勤めていたこともあり、草取り作業を親に頼ることになり、一年で辞めた。その後、除草剤は徐々に使用量を減らしていったこともあったが、基準量の六割くらいまで減らすと、雑草が増え始める結果となり、除草剤の濃度と効果の境目があるように思えた。今は国に認められている除草剤の基準量を均

一に散布することと、田んぼの洩れ水を防ぎ、地肌を出さないようにして、除草剤の効果を減らさないようにしている。

今年はサギやキジバトを多く田んぼで見かけたし、クマやカモシカなどの目撃情報も増えてきた。それは地域の人が減少してゆき、人間がその地域に与える影響力が低下してきたということなのかもしれない。

### ・沢の田んぼ

今年から作るようになった沢の田んぼへは早朝に行くことが多かった。田んぼに着いて車から降り、田んぼを取り囲むように林立するスギなど木立を見ていると心地よかった。しばらくその景色を見た後、畔や法面の草を刈ったり、イネの状態を見たりした。これまで田畑へでることが少なかった私の妻もこの沢の田んぼへは行くようになり、畔の草取りなどをするようになった。ここに居ると副交感神経が優位になるのか、気持ち安らぐ。

この山あいの田んぼは一〇枚に区画されているが、

今年はそのうち二枚は作付けをしていない。六月の下旬ころに田んぼの持ち主がトラクターで耕起したが、その後は今日（八月下旬）まで放置しているため、今はヒエが胸の高さまで延び、ほかの植物とともに田んぼの半分以上を占めるようになった。このまま放置すると、今年中に草で覆われ、その後は笹や萱など、背丈の高い植物に変わってゆくだろう。野生の植物の繁殖力の強さに驚かされる。この田んぼを元に戻すのは、今ならまだ可能だが、時間の経過と共に困難になってゆく。

今年には六月から七月にかけて雨が少ない年だった。七月はほとんど雨が降らず、ため池の水が底につき、給水バルブを開いても水は出てこなくなっていた。七月後半から始まるイネの開花に合わせて、田んぼには水が必要な大事な時だが、この時期に水が無いというのは経験がなく、やきもきした。土地改良区でもこうした場合に備えて、他のため池の水を引けるように配管をしてあり、普段は閉じている弁を開いたが駄目だったと、農事組合法人の代表に連絡があったという。すでに七月の中頃にため池の水が無くなったところは、

イネが黄色く枯れ始めてきたと話していた。雨が降らないというのは、人の力ではどうしようもない。

いつ雨は降るのか、スマホの天気予報を何度も見たりしていたが、八月五日から八日にかけて強い雨になり、一転して今度は洪水の心配をすることになった。その後、八月一九日から大雨で、仙北市の松木内川が氾濫し、多くの被害が発生した。田んぼは河川やため池の水を引いてイネを作るため、こうした河川が氾濫すると被害も大きく、復旧するまで長期化することが多い。

お盆も過ぎ、イネの先についた穂に実が入り始めた。沢の田んぼはヒエやホタルイなどの雑草も目立たず、日照りで水が無いことを心配したことなどが無かったようにイネは静かに時間を過ごしている。農道の脇の一画にタイタンビカスに似たピンクの花が群生している。七月には山の法面にヤマユリが咲いていたし、その前はショウブが咲いていた。

沢の田んぼを維持してゆくにはそれなりの時間と労力が必要だということが分かった。農道や畔の草刈り

はこれまで三回から四回行っただろう。稲刈り前までにもう一度田んぼの周囲の草刈りをして、すっきりとした姿で稲刈りを迎えたい。



## 雑記 (41)

横 山 仁

以前、文学者のO先生から教えられて気になっていたことがある。それは、正岡子規は、象潟も八郎潟もわからぬバカモノだった、というものだ。しかし、このときの子規は、「日本新聞」の記者で、そんなことがあるだろうか。

子規の「はて知らずの記」は、明治26年7月23日から9月10日まで「日本新聞」に連載されたが、「十一日、塩越村を経。象潟は昔の姿にあらず。塩越の松はいかゞしたりけん、いたづらに過ぎて、善くも究めず。」(復本一郎編『子規紀行文集』岩波文庫、2019)とあり、象潟には当然来ている。

亡くなったO先生は、この文を見落としていたのか、『正岡子規全集』には、入っていたと思われるが。

ちなみに、注釈に「子規の『塩越の松』は誤記で、『奥

の細道』中の『汐越の松』(福井)と混同したか」とある。

では、「はて知らずの記」は、どういった契機ではじめられたのか。

《——芭蕉翁のさまよひしあと慕ひ行けば、いつこか名所故跡ならざらむ。其の足は此の道を踏みけむ。其の限は此の景をながめけむと思ふさへ、ただ其の代の事のみしのばれて、俤(おもいかげ)は眼の前に彷彿(ほうふつ)たり——。》

以下、長い引用は、河北新報秋田総局編『秋田と文学の周辺』(北の叢書刊行会、昭和50年)による。

《正岡子規が奥羽旅行の途についたのは明治二十六年七月十九日だった。この年はちょうど芭蕉の二百年忌に当たっていた。すでに肺病は二十六歳の子規の体をむしばみ始めていた。いわば病を押しての旅である。》

《「奥羽旅行は「はて知らずの記」という紀行随筆に

集約されている。題名には子規の気負いが見られる。もちろん芭蕉に対してである。俳人の石田<sup>ツバ</sup>怜〔注、正しくは怜〕水さん（秋田市高陽青柳町）は「芭蕉が足を伸ばさなかったところにも行ってみようという気持ちがあったのではないか。事実、芭蕉の場合は象潟が北限なのに子規は八郎潟まで来ている」と推測している。》

これだと、多少納得いくものがあるが、二、三「子規論」をみても、このことに触れたものはなかったようにおもう。しかし、子規を八郎潟まで行かせたという動機はなんだったのか。

《子規は八郎潟を見てようやく俳人としての生気を取り戻す。

——十三日行脚の足をいたはりて馬車にて秋田に著く。再び人力車にて大久保に赴く。車を下りてありけば八郎潟眼前に横たはりて海の如し。北の方は山脈断続恰も鳥の並びたらむやうに見え西の方は本山真山高く聳えて右に少し離れたるは寒風山なり。…日暮れて

一日市に泊す。僻地の孤村屋室の美魚介の鮮なけれども、まめやかにもてなしたるはうれし。十四日庭前を見れば初めて落葉の大なるを知る。宿を出て北する事十二里盲鼻（三倉鼻）に至る。邱上に登りて八郎湖を見るに山低う閉んで細波渺々（びょうびょう）唯寒風山の屹立するあるのみ。三ツ四ツ掉さし筏静かにして心遠く思ひ幽かなり。》

八郎潟については、先の復本一郎編『子規紀行文集』の注釈に、『『日本名勝地誌』に、「此湖の風景絶佳にして決して近江の琵琶湖に譲らざるべし」と見える。》とある。

面積の大きさについてははしっていたが、「風景絶佳」というのは、初耳だった。このことが、子規の八郎潟行きと関係があったのかどうか。

また、八郎潟メビウスの「八郎潟町の歴史」([http://www.hachirounebius.sakura.ne.jp/HP9812history\\_new.html](http://www.hachirounebius.sakura.ne.jp/HP9812history_new.html))によれば、「1881年（明治14）09月14日、明治天皇が巡幸し一日市村に立ち寄る。三倉鼻にて八郎潟、男鹿半島を眺望する。御在所は現在南面岡公園

にある。」とあるが、これも子規と関係があるのかどうか。

《秋高う入海晴れて鶴一羽——。

旅もここに来てきわまったという感じである。しかし「写生」を旨とする子規にしてはだらしない句だと言う人がいる。田代町岩瀬、元高校教頭松田孫怡さん(六三)で「俳句をたしなむ者として許せない」という。松田さんは「ツルは渡り鳥で八月にはいない、ツルは一羽の単独行動はしない」と指摘しながら「俳句は自然を裏切ってはならず、自然に密着しなければならぬ」と力説する。どうしてもツルを引き合いにするなら「二羽」が妥当なようだ。

他の人からは「入海」もおかしいという指摘がある。いずれにせよ、広大な空間にわれ一人の感を深くしたに違いない。子規の目には一羽の鳥がツルに見えたのか。子規の行脚にはこのあとようやく落ち着きが見えてきた。帰京するのは二十日午後である。》

しかし、芭蕉の「奥の細道」に「汐越や鶴はぎぬれて海涼し」という句がある。(芭蕉は6月16日象潟着、陽暦では8月1日) 子規には、この句が念頭にあったのだろう。(子規は8月14日一日市泊まり)

また、「ツルは渡り鳥で八月にはいない」とあるが、芭蕉が象潟に来たのも8月だが、この芭蕉の句もおかしいということになるのだろうか。

もっとも、飯野哲二編『芭蕉辞典』(東京堂、昭和34年)では、『鶴脛』には衣短く脛を長くあらわした人の姿の意もあるので、この句の鶴脛も、鶴の脛と汐越に立って涼んでいる人の鶴脛とをかけていると解してもよいと思う。」とある。ほかの解説書では、ここまで深く解説したものはないようだ。

と書いたあとでみつけたのが、安東次男『芭蕉百十句』(文春文庫、1989)で、この句の解説があった。興味深いので、長くなが引用する。夏の部に入っている。

《 汐越や鶴はぎぬれて海涼し

『おくのほそ道』。「秋田にかよふ道遙に、海北にかまえて、浪打入る所を汐ごとしと云。江の縦横一里ばかり、梯松島にかよひて又異なり。松島は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をやますに似たり」に續けて、「象潟や雨に西施がねぶの花」と共にしるす。

雨上りのネムの濃抹に傾城の美女を思い、浅瀬に佇むタンチョウの涼しさに旅の僧形を写し見るという一対の興の趣向で、二句は同時同所で作った句をただ並べて紀行中にするしたわけではない。後者は、とりも直さず、汐合の河口に裾からげして涼を取る芭蕉と曾良の墨染姿である。

この句の見所は、もう一つ、「松島や鶴に身をかれほとゝぎす 曾良」に打添う唱和だ、というところにある。片や「鶴に身をかれ」ともとめたから、片や「鶴脛」を以て答としたのだ。松島と象潟が、表日本から裏日本へ巡遊する旅の、まさに形勝の目玉だと知っていれば、この滑稽は容易に気がつくはずの興で、同行

俳諧の醍醐味がそこにあるが（一人旅ではこうはゆかぬ）、今まで誰も指摘した人はいない。旅の日数にして一カ月余り、其間、記述の上でも相当の分量があるから、つい彼此の交響を忘れたものか。『去来抄』や『三冊子』にもふれるところがない。（両句の関係を見咎めて問う人があれば芭蕉は右のとおり答えたはずだ）。不思議なことである。

ともあれ、江戸出発から既に二カ月と二十日、旅のやつれもようやく現れて見える句ぶりは、同行の「鶴に身をかれ」があつていつそう引立つ。

この句には、『ほそ道』とは別に、「腰長の汐といふ処いと浅くて、鶴おり立てあさるを、腰長や鶴脛ぬれて海涼し」という、いかにも見て来たままのような書付（懷紙）がのこされている。曾良の「書留」にも「腰たけや」とあり、象潟川が海に合うあたりの浅瀬の名である。

鶴は冬鳥として日本内地に渡る。歳時記では凍鶴（冬）、鶴来る（秋）・帰る（春）と遣う鳥である。鶴とだけでは雉（無季）の詞だが、夏の季語（涼）にわざわざこれを取合せて遣う無粋を、俳諧師なら気にせ

ぬはずはない。加えて、当時の棲息環境がよくわからぬが、夏場に鶴の姿を見かけることなどよほど珍しかったろう。それにしては右の詞は、ごく当りまえのように書いている。

「鶴おり立てあさるを」は、見立の興でなければ、土地の古老から聞いた話とでも読むべきか（通説は眼前景と解して疑っていない）。なお、種類はタンチョウだろう。タンチョウは現在、北海道釧路地方で繁殖が確められている。》

いずれ、くわしいことは、俳人の石田冲秋さんにきいてみたいところだ。

野崎左文『日本名勝地誌』（第五編 東山同之下、東京・博文館蔵版、明治廿八年）から、参考までに一部紹介する。

「此湖の広袤東西三里、南北七里二十三町、周回凡そ二十里、湖口西南に開けて海に通ず、沿岸鹿渡駅内に美倉ヶ鼻と称する処あり東北御巡幸の際聖駕を此に

駐めて風景を賞し給ひし地にして傍らに碑あり川田甕江の文を刻す、湖を望む此地を以て第一となす」（ルビは省略、旧字は新字に直した）

やはり、八郎潟は、名勝としていられていたようにおもえる。

## \*

日本のアフリカの移民受け入れ（ホームタウン認定）がネットで炎上している。

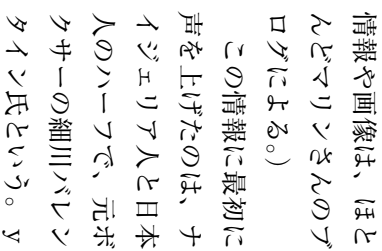
山形県長井市→タンザニアの故郷（ホームタウン）

千葉県木更津市→ナイジェリアの故郷

新潟三条市→ガーナの故郷

愛媛県今治市→モザンビークの故郷

売国の政府やJICAは、たとえばナイジェリア政府の公式発表に誤解だとかいっているが、JICAのホームページでは、しっかり説明されているという。（ワリンさんのブログ「あなたの身体は食べ物で創られている」<https://ameblo.jp/amiraclehappens/>参照。



<http://dx.doi.org/10.1016/j.jmb.2011.07.014>

情報や画像は、ほとんどマリンスさんのブログによる。）

この情報に最初に声を上げたのは、ナイジェリア人と日本人のハーブで、元ボクサーの細川バレンタイン氏という。youtubeでも発信しているが、国際政治学者の藤井厳喜氏も、緊急で細川バレンタイン氏との対談をアップしている。



この平和ボケをした日本人の想像をはるかに超えた事が、ナイジェリアで起きています。

て、フイフイ  
×細川バレン  
タイン×やな  
がせ裕文氏の  
鼎談をアツプ  
している。

『令和のグ  
レート・リブ  
レイスマネ  
ント  
(移民政策)』  
英文記事画像  
省略、日本は

る計画であるらしい。

今後 100 年で毒ワクチンと放射能で、日本人が 1 億 2000 万から 6000 万人に半減するから、減少分を外国人で埋めるためだ。

中国人と朝鮮人で 5000 万人、残り 1000 万人は世界各国からの移民で埋めるということで、それがノルマとして課されているようだ。

この移民政策は、カレルギー計画とか、国連で「グレート・リプレイスメント」と呼ばれ、日本版は令和計画とも呼ばいいのか。

令和と言う年号は、日本人を絶滅させて、日本の国土を外国移民で雑婚にし、「倭人を零にする」と言う意味であるからだ。

欧州では、アフリカや中東からの移民が増えて、犯罪率が増加して治安が悪化し、人種による分断が起こつて苦しんでいる。

中国でも「一带一路」で、アフリカ人留学生を大量に入れたら、連中は勉強も仕事もしないし、犯罪とエイズが増えただけだった。

移民を増やしてもいいことは何もなく、グローバルストが国民国家を崩壊させて、民族の伝統や歴史を消し去るための売国政策だ。

野崎晃市（51）2025-09-01》

トランプ大統領による U S A I D 解体で、中抜きできなくなった連中が、その穴埋めに A T M 日本にやってきたといわれる。石破からゲイツへのプレゼントも、どれだけキックバックがあるものやら。ホームタウンの市長なども同じ穴のムジナだろう。金に汚いクズどもだ。さらに、アフリカからの移民というのは、長崎大学にあるエボラ研究所からエボラ菌が流出されたばあいの保険の役目ともいわれる。ワクチンで儲かるのは、製薬会社や株主のゲイツなどだから。

## あとがき

◆エダマメの莢が畝の表面に無数に落ちていた。同じ菜園仲間の一人が、ネズミの仕業で他にも数人の「湯上り娘」が食われたと知らせてくれた。落ちた莢には噛んだ小さな穴が空いている。枝に残った莢は痩せているし、衛生面の不安もあるので、残念だったが食べずに処分した。しかし来年はどうする。(S)

◆ある会合で意見を求められたので返答したところ、年配者から場違いな質問が直接返ってきた。議長の困惑顔がその場の私を救ってくれたが、未だに意図不明。年齢によるもの？と感じてはいるが、とすれば、「お前もだよ」と言われているような気もしていささか不安。(B)

◆バックバンドのついた古い皮のサンダルを履いている。40年以上前に宮城県の古川で買ったもので、ドイツ製だった。靴底は2度修理してもらった。今年、その店の工房をネットで見つけ、連絡して行くと同じサンダルが置いてあった。私がこの店で買ったサンダルを記録しており、用意してくれていた。店の主人は健在で今も靴を作っている。(T)

◆YouTubeの対談で細川氏は、ナイジェリアがでてこなかったら、ツイートしていなかったと話していたが、不幸中の幸いだったか。氏の本を紹介すると、『ボクシングの見方が一発で変わる本』。また、各地で起きた道路陥没事故が変だなとおもっていたが、マリンさんのブログによれば、どうやら、地下にフエンタニルの工場があったのでは、という情報も出てきた。(何年か、種をまいても咲かず、忘れたころに咲いてきたのは松葉ボタン。トマトはどうなることやら)(J)

---

「海市」 第41号

2025年9月11日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方